

(2020年度) ちゅうでん教育振興助成

高等専門学校の一部 (2021年度助成)

報告書資料 No - 12

学校名	大島商船高等専門学校
活動・研究のテーマ	ジェンダー学の視点による商船高専の女性船員育成の実践

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 活動の意義と目的

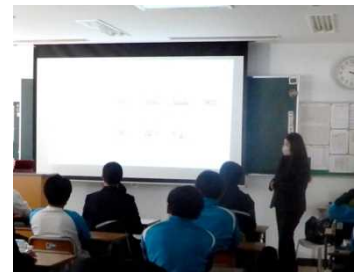
性別を理由として、社会的役割を固定化する考え方はいまだに根強く、就職の際には性別は大きな影響を与える。その最も顕著な例の一つが、「船員業」である。本活動の目的は、男性主導の業界である「海運界」において、将来はリーダーシップを備えた船員として活躍することが可能となるように、商船高専・商船学科の女子学生を育成することである。また、本活動の成果を他の商船高専にも波及させることで、商船高専全体の女子教育を活性化させ、海運界の女性船員の活躍推進をはかり、海運界の男女共同参画を目指す。

昨今、国土交通省海事局・船員政策課は船員業の男女共同参画の推進を目指し、平成29年には「女性船員の活躍推進に向けた女性の視点による検討会」を立ち上げて議論を重ねてきたが、この検討会における3名の学術有識者のうちの1人として申請者も会議に参加した。そこで明らかになったことを提示しながら、本活動の必要性和重要性について述べたい。我が国の海運界では女性船員の比率はわずか2%にとどまっている。また、女性の雇用に対して積極的な姿勢を示す船社は1割にも届いておらず、必ずしも女性船員の就労が促進されている状況にはなっていない。一方、商船高専をはじめとして、船員教育機関では、過去5年間の平均で、7割近くの女子学生が船員として就業することを希望しているため、出口となる就労環境を整備していくことは必須であり、また船社に就職した女子学生が「女性船員」として長らく就業していくことも重要である。さらに、女子学生たちは船員になることを希望していても、船員業について不安を抱いており、その多くは情報不足から発生する不安であると考えられる。女性船員の活躍を推進するためには、女性の雇用に消極的な船社の意識を変えることも重要だが、女性船員の視点からの情報を十分に得て、それを船員志望の女子学生に発信することも重要である。本活動では、船員業の諸相や労働状況についての情報を既に船員として活躍している人々から得て、それを女子学生に発信するとともに、実際の船員業ではどのような人材が必要とされるのかということ調査して、それに基づいて商船高専での女子教育を実践していく。また、国立高等専門学校機構は、「高専女子フォーラム」というイベントを開催して、女性エンジニアの育成に力を注いでいる。しかしながら、そういった取組みにおいて対象となっているのは工業系高専の女子学生であり、商船高専・商船学科の女子学生は念頭に置かれていない。それは、全57高専(国公立)のうち、52高専が工業系高専であり、商船高専はわずか5高専しか存在していないという背景があるかもしれない。しかしながら、我が国は海運国であり、海運業は我が国の産業において最も重要な業種の一つであることは否めない。ゆえに海運業界における男女共同参画推進は避けては通ることはできないと考える。

2. 活動報告

本活動では、船員の「多様性」に着目し、現在の海運界における女性船員の活躍状況を調査することで、本校商船学科の女子学生の啓発を実施した。活動の方法としては、女性船員の講演会・海技教育機構へのインタビュー・商船高専の女性教員間での情報交換・女性船員と船社へのインタビューなどを実施した。

本講演は女子学生だけではなく、男子学生も対象として、性別上の固定観念が強く根付いた業界である「海運界」において、男女の別にかかわらず、学生が将来的にリーダーシップを備えた船員として活躍することを目的として実施した。男女両性にとって、船員として就業するにあたり、学生時代から学ぶべき事象について、実際に内航海運の航海士として現場を経験した卒業生に講演いただいた。



また、海事教育機関の女性教員間における情報交換を通して、以下の内容が明らかになった。

- ・船員にとって他者の意見を聞き入れる柔軟性をもつことは重要である。すべての職業にも当てはまることであるが、とりわけ、船員は船内において長期にわたって共同生活を行うことから、コミュニケーション能力は極めて重要である。

- ・女子学生が腕力に乏しいのは仕方のないことであるが、近年では、多くの船種において男女共にそれほど腕力が求められることはない。むしろ、男子学生でも腕力のない学生も存在する。

- ・船員にとって重要なことは、船を安全に運航させる能力だが、これは男女の差は全く関係ない。たとえ女子学生が腕力に欠けるとしても、他の分掌で活躍することは十分に可能である。大切なことは、最初からできないからと言って逃げるのではなく、とりあえずやってみるということだ。性別にかかわらず何事も経験して、自分の得意分野を開拓していくことが重要である。このことは男子学生も当てはまる。それができれば、腕力がないとしても、女子にも全く支障なく船員業は務まる。

- ・男性も女性も一生船上で働く者は少ない。数年間隔で海と陸の仕事が交互に割り当てられるからである。陸上において、船舶管理や船員管理を行う際、人間対人間になってくる。つまり、現場の立場を理解しながらマネジメントできる力を養う必要がある。男女にかかわらず、船員としてだけでなく、陸の仕事にも対応できる能力、すなわち、コミュニケーション能力や判断力を身につけておくことが必要であろう。

現役の女性船員と船社からのインタビューからは、女性船員の雇用に対する船社の本音と女性船員の現状が明らかになった。海運界における男女共同参画の呼び声が高まっている昨今、女性船員の雇用に踏み切る船社が少しずつでも増えつつあるのは喜ばしいことであるが、ほとんどの船社が最初は戸惑いを覚えていることが明らかとなった。結局のところ、男性と女性の決定的な相違は、女性に結婚や出産の問題がつきまとうということである。船員業だけではなく、すべての業種に当てはまることであるが、性別を超えて男女が活躍できる土壌を構築するには、ワークライフバランス（以下「WLB」という。）がキーワードとなるということだ。我が国においても、現在ではWLB 推奨は広くいきわたっており、理論上は性別にかかわらず、仕事と私生活を両立させて、キャリアアップできることが目指されている。しかし、現実にはそうはなっていない。最大の原因は「家父長制」と「性別役割分業」のイデオロギーがいまだに根強く存在していることである。これらのイデオロギーが根付いた社会では、家内労働を担当する女性は家外での経済活動を制限され、家外労働を担当する男性は家内労働に従事することを制限される。一方で、現代では性別による役割分担に抵抗を感じる男女が増えつつあり、また家族という組織を形成しない男女も多くなった。本活動を通して明らかになったことは、現代は性別役割分業に捕らえられた概念を脱構築しなければならないということだ。もちろん、性別役割分業のシステムに違和感のない男女はそれでよいが、それはあくまでも多様な生き方の中の一つの選択であるべきで、性別がすべての基準となってはいけない。

最終的に本活動を通して、女子学生に対して、大きく分けて二つの内容を啓発した：一つは、船員として生きていくには、長期的に人生設計を立てていくことが重要である。女性は結婚や出産などで大きくライフステージが変わっていく可能性が高いゆえに、そのような変化が起こった際に、完全に船員を辞めてしまうのではなく、籍を置いたまま復帰できるような船社に就職することが重要となるからだ。そしてもう一つは、「船員らしさ」は「男らしさ」と同義語ではないということだ。将来、船員を目指す女子学生にとって、今までの固定観念を払拭し、「女性特有のマスキュリティとは何か？船員として自分はどうありたいのか」という独自の船員像を学生時代から形成していくことは必須である。それは、今後、船員としてキャリア・ディベロップメントを目指す際に重要なキーポイントとなると考えられる。

3. 今後の課題

同じ学力・能力の場合、多くの船社は男子を求めることが多いが、それは女子が劣っているからということではなく、企業側が女子の雇用に慣れていない、不安に思っている、ということである。しかしながら、本活動における調査で明らかになったことは、腕力以外は、たとえば、知識や判断力等々、男女の性差はほとんどないということである。結局のところ、女性が船員として能力に劣るということではなく、「船員＝男性」という固定観念によって女性が排除される傾向があるということではないだろうか。大切なことは、長い歴史の中で生み出されてきた船員文化や船員特有の価値観を念頭に置いた上で、女性船員の活躍が推進できる「新しい船員文化」や「新しい船員像」を構築する工夫を多角的に行っていくことである。